

●施設便り



施設紹介

長尾病院 腎臓内科
中村 紀子

長尾病院は、福岡市城南区の東端（南区との区境）、福岡都市高速外環状線沿いに位置する、リハビリテーション医療を主体とした123床の病院です。1965年の開院時は心療内科主体でしたが、ほどなくして服部一郎初代病院長（服部文忠現病院長の御尊父）が、当時は数少なかったリハビリ特化型病院へと大きく舵をきり、その歴史が始まりました。他院に先駆けて1981年より言語療法を開始し、介護保険制度の導入に合わせて介護老人保健施設、訪問看護ステーションを併設するなど、医療ニーズや時代の流れに合わせて成長を続けた結果、多様なリハビリテーションに対応できる今の姿へと発展しました。特に脳卒中の分野においては、一般的な身体訓練以外に、言語聴覚士による言語療法や、薛副院長と専門知識を持つ言語聴覚士、管理栄養士がチームを組んで長年取り組んできた摂食嚥下訓練も可能であり、様々な障害に対する専門的なアプローチを行えることが強みとなっています。先進的な取り組みとして、リハビリ支援ロボットによる歩行訓練やゲーム感覚で楽しめる起立訓練を行っているのも特徴です。



さて、そのような当院における透析診療は、九州大学病院第二内科腎臓病研究室出身である服部文忠現病院長が自身の専門を生かし、1984年に19床の人工透析室を開設されたのが始まりです。その後1998年の病院リニューアル時に36床に増床となり、現在では外来、入院合わせて95名前後の透析患者さんが維持血液透析を行っています。透析は、月水金午前・午後・夜間、火木土午前の4つのシフトで実施しており、九州大学病院腎臓・高血圧・脳血管内科、福岡赤十字病院腎臓内科の先生方に多くのサポートをいただきながら、専任看護師：18名、臨床工学技士：4名の透析室スタッフの下で運営されています。透析室は一面窓に面した明るい空間で、城南区の自然のシンボルである油山を毎日望むことができます。リハビリ室、デイケア室と同じ2階フロアに位置しており、周囲はリハビリの患者さんやスタッフで終日賑わっています。外来透析の患者さんの中には、透析前にリハビリを行ってから入室される方や、非透析日にデイケアに参加される方もおられます。

当院透析室の大きな特徴は、透析をしながら専門的な入院リハビリが実施できることです。福岡赤十字病院、福岡大学病院、九州医療センター、九州中央病院など、近隣の基幹病院より幅広くご紹介いただいております。常時5-10名程度の透析患者さんがリハビリ目的で入院しておられます。直近5年の入院透析においては、原因疾患は骨折などの整形外科疾患が41%と最多で、脳

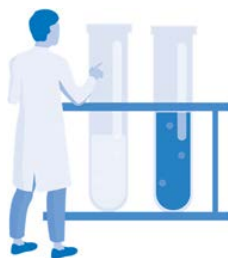
血管障害が15%、廃用症候群が13%、肺炎・尿路感染等の感染症が13%、末梢動脈疾患による下肢切断が7.5%という結果でした。専門的な摂食嚥下訓練、言語療法が行えること、義肢装具士が常駐し本格的な義足作成に対応可能であることが当院のリハビリの強みであり、今後も脳血管障害、下肢切断の患者さんをより積極的に受け入れていきたいと考えております。入院後の転帰については、70%程度の方が自宅あるいは施設に退院された一方で、入院中に急性疾患（脳卒中、足壊疽、消化管出血、胆石性胆嚢炎、結核etc.）を併発し、基幹病院にて転院加療いただくケースも15%以上ありました。回復期の透析患者さんの全身管理の難しさを痛感するとともに、いつも快く対応下さる基幹病院各専門科の先生方に大変感謝する次第です。

外来部門については、現在90名前後の維持血液透析患者さんがおられ、平均年齢73.8歳（36-94歳、全国値70歳）、透析歴10年以上35.1%（全国値27.4%）、透析歴20年以上12.8%（全国値8.6%）と、高齢の方、透析歴の長い方が多い透析室となっています。年間あたり転入が10-12名、転出が3-7名程あり、残念ながら亡くられる方が2-6名程おられます（死因：悪性疾患26%、感染症16%、心疾患11%、末梢動脈疾患11%、脳卒中5.3%、その他32%）。患者さんの高齢化、透析の長期化により心血管合併症、悪性腫瘍、長期透析合併症のリスクは一層高くなっており、リン管理、血圧管理等で心血管病の発症抑制に努めるとともに、病院としての機能を生かし、定期検査による心血管病の早期発見、悪性腫瘍のスクリーニングも積極的に行っています。実際、無症候性心筋虚血や年数例の癌（腎癌、早期の消化器癌）が見つかっており、検査の有用性を感じております。また、臨床工学技士によるエコーを活用したバスキュラーアクセス管理、糖尿病フットケア指導士による定期的なフットケアにも力を入れています。リハビリ病院としての特質を生かし、非透析時/透析時のリハビリ、言語聴覚士による嚥下評価、義肢装具士による靴・装具の評価、管理栄養士による食事サポート、MSW及び併設介護部門（デイケア、通所リハ、訪問看護）による介護支援も可能です。いずれも特筆すべき特徴ではないかもしれませんが、少しでも透析患者さんのQOL向上、生命予後改善につながるよう、多職種で連携をとりながら、日々地道に診療に携わっております。

リハビリテーションの理念は、障害を持つ人々が可能な限り最高の機能レベルを達成し、自立した生活を送れるようにすることであり、身体的、精神的、社会的な側面を含めた全人間的な復権を目指すものです。その精神は、透析診療においても通じるものであると考えます。「患者一人ひとりのライフステージに応じた最良の医療・福祉の提供」という当院の基本理念の実現を目指し、透析患者さんにより良い医療、包括的な医療を提供できるよう、努力を続けて参りたいと思います。



●施設便り



今村クリニックの紹介

医療法人 今村クリニック
院長 今村 克郎

皆様、日頃から大変お世話になっております。

2024年4月、先代院長の今村敦郎の後任として、今村クリニック院長に就任した今村克郎と申します。当医院は、1994年7月に外来維持血液透析サテライトクリニックとして、開業致しました。元々は入院施設がない無床透析クリニックでしたが、「透析患者様を最後まで診てあげたい。」という、元院長やコメディカルスタッフの想いから、2001年6月に増築し有床クリニックへと進化し、透析患者様の入院看取りが可能となりました。また、入院施設と同時にリハビリテーションも開始し、送迎車に乗る練習を含むリハビリを行い、通院再開できるように努めています。2019年8月に新築移転した際に透視室も備え、血液透析患者様の経皮的シャント拡張術を開始、2022年7月に当方が勤務開始と同時に腹膜透析外来、往診・訪問診療を開始しました。さらに2024年4月に手術室も造設し、シャント作成やグラフト移植術も自施設で行えるところまで成長いたしました。

2025年7月開業31周年を迎えた現在、保存期腎不全外来、血液・腹膜透析、リハビリテーション、バスキュラーアクセス管理、在宅看取り、往診・訪問診療が可能な有床透析診療所となっています。

血液透析では、透析条件や膜材質などを患者様個々に調整し、透析効率を上昇させることを追求するのではなく、場合によっては透析効率をあえて下げるなど、きめ細やかな設定を行っています。また、自施設でシャント増設からエコー観察、経皮的シャント拡張術・血栓除去術などバスキュラーアクセス管理を行うことにより、患者様が他院へ受診する負担が軽減できています。

●病院概要

〒807-1263

福岡県北九州市八幡西区金剛2-2-1
1994年7月開設 院長今村克郎
病床数19床 透析ベッド数58床

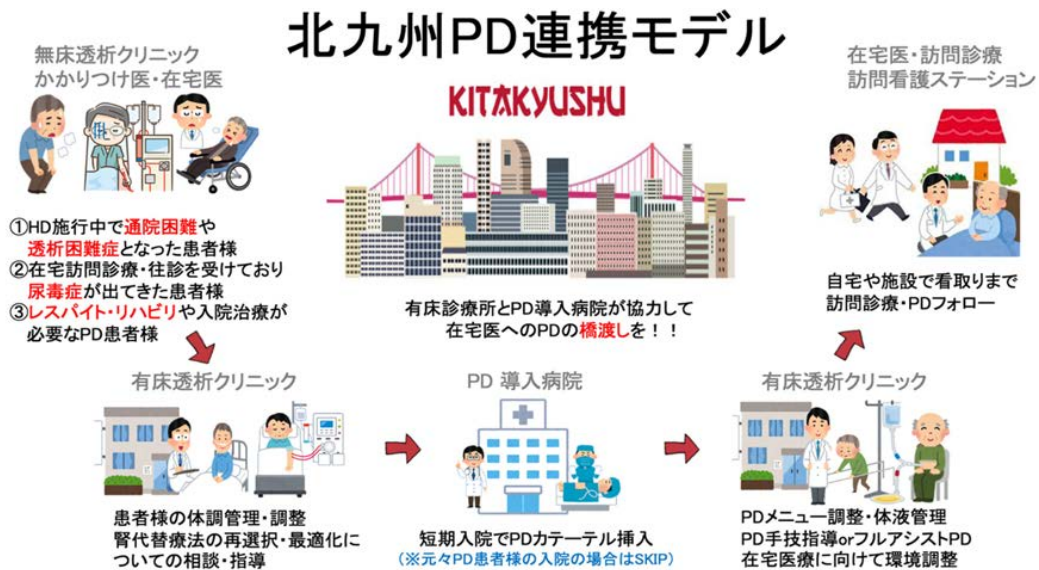
透析患者数 128名（うち腹膜透析患者10名）
常勤スタッフ 医師2名 看護師22名 臨床工学技士8名
リハビリ技士3名 薬剤師1名 2025年7月現在



医療法人
今村クリニック



北九州市の高齢化は著しく、すでに人口の約3人に1人が高齢者となっております。高齢化が進む透析医療の領域において、腹膜透析は「最後まで在宅で透析を続けたい」という患者様やご家族の思いを叶えるための大きな透析医療の「出口部戦略」の一つと考えています。当医院では周辺の基幹病院と連携し、腹膜透析カテーテルを挿入前後に、短期的な入院を経て在宅診療に繋ぐ「北九州PD連携モデル」というシステムを構築しています。



基幹病院は腹膜透析導入後の患者転院先が確保され、在宅医は体調・生活や腹膜透析環境が整った後に往診・訪問診療が可能となり、超高齢腎不全患者様でも、積極的に腹膜透析を導入出来るようになりました。

少数ですが、患者様の中には、透析を止めたり、保存的腎臓療法で在宅看取りを希望される方もいらっしゃいます。

そのような方を含めて、患者様個々に合った腎不全治療・透析治療・在宅医療を提供できるよう今村クリニックスタッフ一同、これからも頑張ります。よろしくお願い致します。

●施設便り



日常に寄り添う、心と体を支える優しい医療

島松内科医院
三村 夏子

このたびは、施設紹介の機会をくださりありがとうございます。
ます。

当院は、医師・看護師・事務スタッフあわせて25名のチームで、透析と一般外来を中心に診療を行っております。その他、栄養士や薬剤師の先生方、送迎ドライバーの皆さん、清掃管理の皆さん、沢山の方々のサポートにより、患者さんの健康を支えています。

「患者さんもスタッフも、皆が温かく通える場所」を目指し、日々の診療に取り組んでおります。

私たちが大切にしているのは、患者さんの“日常”です。悩まれている症状が少しでも改善することで、快適な日常に近づけます。

特に、外来透析を受けていらっしゃる患者さん達にとって、日々の安らぎは大切です。

お天気や季節の移ろい、散歩のこと、お庭のお花や畑仕事、趣味や週末の出来事、夜眠れなかったこと、時にはお仕事のこと、嬉しかったこと悲しかったこと…。

そうした日常の会話の中に、医療のヒントが隠されていることがあります。

その気づきを診察や検査結果と重ね合わせ、よりよい診療・治療へと繋げていけたらと私たちスタッフ共々心がけております。逆に、患者さんの言葉、お姿から、私たちが元気づけられたり、勇気やパワーをいただいたりすることもあります。



クリニック入口



島松和正医師と三村佳弘医師

何もお話にならなくても、毎回の回診の中で心身のお元気な様子が伝わってくることもあります。体重を測る姿、新聞を読んだりラジオを聴いたりテレビを観る姿、眠っている姿。

私たちは、毎回の回診、2週間ごとの血液検査、定期的なレントゲンなどを通じて、こまめなドライウエートの調整や投薬の見直しを心がけております。

こうした取り組みの積み重ねが、お一人お一人にとって心地よい日常の支えとなるよう努めております。

当院は1976年に内科として開院し、1989年には腎臓内科外来および透析診療を開始いたしました。

さらに2024年からは皮膚科外来診療も加わり、透析患者さんの痒み、皮膚潰瘍や白癬などの治療も積極的に行っております。

また主要基幹病院との連携により、必要な際には迅速かつ的確に対応できる体制を整えております。

より患者さんの日常が快適なものになりますよう、診療の幅を広げながら地域に貢献してまいりたいと思っております。

「医療面から心と体を支えながら、患者さんが安心して暮らせる毎日をサポートする」

その思いを原点に、これからもアットホームな雰囲気の中で、安心と信頼をお届けできるクリニックを目指していかたと願っております。

今後とも、よろしくお願い申し上げます。

島松内科医院

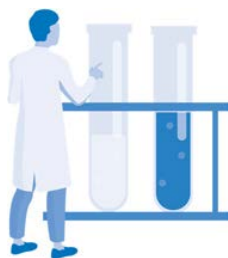
福岡県筑紫野市二日市中央5-5-16

(092) 522-2052

詳しくは、当院ホームページをご覧ください。



●施設便り



施設便り

なかしま内科・糖尿病・腎クリニック
中嶋 崇文

飯塚市で開業医をしておりますなかしま内科・糖尿病・腎クリニック院長の中嶋崇文と申します。

私は九州大学第二内科腎臓研究室に所属しており、飯塚病院腎臓内科で筑豊地域の透析医療に従事し、2020年6月1日に飯塚市西町で現在のクリニックを開業しました。

当院の前身は鯉田診療所で、私の祖父である中嶋信行が1966年6月1日に開業しました。意図せず診療所と当院の開院日が同じ日となったことに、運命めいたものを感じています。

鯉田診療所と透析医療との関わりは古く、診療所は1971年10月に血液透析を開始しています。

当時、本屋をしていた友人が透析のために済生会八幡病院へ通院しており、それを知った祖父が友人のために済生会八幡病院へ透析医療を学びに行ったことが診療所での人工透析の始まりです。

その後、診療所は父である中嶋文行が受け継ぎ、透析医療を中心として筑豊地域に根差した診療を続けていました。



私が継承するタイミングでは、診療所の建物は老朽化しており、飯塚バスターミナルから徒歩5分という利便性のよい現在の場所に診療所を新築移転し、現在の名称に改めました。

当院は糖尿病内科、腎臓内科、循環器科を標榜しており、私は血液透析や腹膜透析を含んだ慢性腎臓病診療を行っております。

現在当院へ外来通院されている患者は約800名で、そのうち保存期の慢性腎臓病の患者は250名ほどです。

様々な慢性腎臓病ステージの患者がおり、当院では療法選択外来も行っています。

開業して5年が経過した中で、当院の療法選択比率は血液透析と腹膜透析は6：4ほどで、腎移植を選択された方も複数名おられました。

当院の療法選択外来の特徴は、クリニックという規模の小ささを活かし、医師や看護師といった医療従事者と患者・家族との面談だけでなく、血液透析室の見学や実際に血液透析や腹膜



透析、両者併用療法を行っている患者との面談などを積極的に
行っていることを挙げます。

また腎移植を希望されている患者にも、腎移植後も糖尿病治
療などで当院通院を継続されている患者に協力していただき、
腎移植された患者との面談を行っています。

透析医療に限らず当院ではチーム医療を基本としており、医
師、看護師、臨床工学技士のほか、臨床検査技師、管理栄養士、
理学療法士など多くの職種が当院での診療には関わっています。



当院の血液透析診
療の特色の一つとし
て、患者の健康増進
を目的に血液透析終了後に希望者へ透析食を提供して
いることを挙げます。

「食事は医療の根幹を成すもの」という前院長の方
針のもと前身の診療所で始まり、現在も継続しています。

管理栄養士は栄養指導を行うだけでなく、実際に透析食を食べている患者の姿を見て、個々の
患者の食事量、嗜好の変化、嚥下などの観察をしていただいています。こうした観察・確認を日
常の指導に役立てていただいているほか、患者に嚥下機能の低
下が見られる場合は理学療法士と管理栄養士が相談し、食べや
すい食品の提案や食べにくい食材の調理法をアドバイスしたり
、飲み込みやすい姿勢を取れるよう指導したりするなどの介
入を行っていただいています。

また、血液透析患者も週3回だけでも食べ続けていただくこ
とで塩分やカリウム、リンなどの管理が単純に向上するだけでなく、自宅での食事療法へのモチ
ベーション持続や患者同士の情報交換の場などとしても活用いただいています。

当院の腹膜透析外来は、飯塚病院腎臓内科での恩師である武田先生がされていた複数名の腹膜
透析患者を医師・看護師・管理栄養士などの医療チームで診療する“検診型診療”を行っています。

これは医師の診察前に担当看護師が前回の受診以降の生活や治療状況を聞き取り、その情報を
把握・整理したうえで、看護師との面談後に栄養指導にあたる
管理栄養士にさらに確認してほしい事項を申し送る。そして、
管理栄養士が栄養指導を通して追加の情報を収集した後、医師、
看護師、管理栄養士の3者でミニカンファレンスを実施し、腹
膜透析の治療方針を決めたうえで医師が診察を行う診療スタ
イルです。

また複数名の腹膜透析患者が同時に受診することにより、外来診療日を腹膜透析患者同士の情
報交換の場として活用いただいています。

当院ではこの検診型診療に理学療法士を加えることで、腹膜透析患者のフレイルやサルコペ
ニアの予防をできるようにしています。





また、理学療法士には血液透析や腹膜透析の患者だけでなく、糖尿病や慢性腎臓病保存期患者への介入を外来診療だけでなく、患者会への参加なども通じて積極的に取り組んでいただいています。

クリニックがスタートを切った2000年は、新型コロナウイルス感染症が感染拡大した直後のことで、距離をとることを求められました。そのため、開業を志した際にやりたかったことの多くが出来ませんでした。

しかしながら、コロナ感染症が5類となり糖尿病や腹膜透析の患者会発足など、やりたかったことを形に出来るが増えてきました。今後は、糖尿病教室や慢性腎臓病教室などの患者教育に注力していきたいと考えています。

これからも祖父が友人のために始めた透析医療とともに、当院の診療理念として掲げた“よりそう医療”を胸に、この飯塚の地に根差した診療を続けていきます。



●施設便り



施設便り

済生会八幡総合病院腎センター
(現腎臓内科、透析外科)

安永 親生

開設97年を経た2024年12月、当院は北九州市八幡東区春の町より八幡西区則松に新規移転となりました。このたびはせっかくの機会を頂きましたので、当院の歴史と過ぎ去っていった先生方を中心として、施設のご紹介をさせていただきたいと思っております。

済生会病院は「恩賜財団」、明治天皇の済生勅語をもって実践する病院となります。

腎センターの血液透析治療は1968年(昭和43年)6月、米国ミルトン・ロイ社製人工腎臓装置+キール型ダイアライザー1台によりスタートしました。当時のメンバーは故中村定敏先生(のちの北九州クリニック→小倉第一病院院長)と故佐藤威先生(のちの東海大学移植学教室教授、第37回日本透析医学会会長)で昭和45年1月より故合屋忠信院長が加わっております。故合屋院長は昭和60-61年に福岡県血液透析施設協議会(現在の福岡県透析医会)の会長もされておられます。

当院を紹介する際には、よく「西日本で最初の透析施設」と冠することが多いのですが、西日本を東西での西日本とした場合には、昭和42年の広島のおかね会土谷病院となります(川西秀樹先生に直々言われました)。

初版台帳に記録されている第1例目の患者さんは16歳の女性、原疾患はループス腎炎でした。透析を施行できたのは2回のみ、死因は高K血症とあります。長期維持透析へと移行できたのは3例目以降でした(179回と記載されています)。

透析コンソール数も限られており、当時の導入基準としては年齢60歳以上、原疾患糖尿病性腎症は適応外だったようです。

透析患者さんが100人以上まで増えたため、中村定敏先生が昭和47年12月に北九州クリニック(現小倉第一病院)を開業、代わって米国腎臓専門医であった、レジェンド藤見惺先生が約1年間、透析療法の基本に渡って当院を指導しておられます。



藤見惺先生

維持透析継続のため、昭和45年(1970年)10月より内シャント法を開始、1978年の当院手術症例ではBrescia-Cimino原法RCAVFの5年長期開存率が70%であったと報告しています。昭和47年5月には第1例目の生体腎移植も成功し順風満帆であったところ、昭和48年3月に当院は未曾有の病院火災に見舞われます(ちょうど昭和47年5月に千日デパート火災という、高層ビル大規模火災が起きた時代です)。腹膜透析患者さんとその家族も含めて13名の死亡者を出し、当院にとっては痛恨の出来事で大



中村定敏先生



佐藤威先生



合屋忠信先生



中本雅彦先生(真ん中)

きな試練となりました。全国の済生会と地域病院の支え、および地域住民の信頼を得て、何とか乗り越えることができたことと合屋院長が病院70年誌に書いています。

昭和55年1月より臨床試用からCAPDを開始、昭和57年10月には福岡赤十字病院の藤見惺先生の協力のもと、第1例目の死体腎移植を施行しています。CAPDといえば故中本雅彦先生、昭和63年から当院2回目の勤務で、私も平成5年以降10年間以上に渡りご指導を受けました。

学術活動に情熱を燃やされており、第4回腹膜透析研究会、第3回アクセス研究会、第6回長時間透析研究会などを主宰され、私も海外学会での発表を含め実

験や研究に協力させていただきました(ちなみに私、肝臓外科⇒実験病理学(菰田哲夫先生と同時期後輩)出身のため、腎臓領域に入ったのは腎センターに就職してからとなります)。

当院から直接開業された先生方としては、先述の中村定敏先生に次いで新王子病院の市丸喜一郎先生、今村クリニックの今村敦郎先生、ひがしだクリニックの松尾賢三先生、吉祥寺クリニックの内田裕之先生などがおられます。また、九州大学第二内科や佐賀大学腎臓内科より多くの先生方の勤務にご協力をいただきました。

2回目の腎センターの危機は2011年(平成23年)、前々M院長の専横により、腎臓内科医総退職⇒内科総退職という事態が引き起こされたことです。これにより腎センタースタッフは半減以下となり、通常の外来や入院などを縮小することで対応しました。2013年にはM院長が招聘した救急部トップ以下全医師も総退職となり、済生会本部より同院長は退職勧告となっています。

夏季休暇もない厳しい状況が続く中、2020年からのCOVID-19パンデミックも経て、前および現院長の働き掛けもあり、2024年4月より産業医大腎臓内科より腎センタースタッフを送っていただくこととなりました。

現在は古野郁太郎部長のもと、常勤2人+非常勤2人体制となりました。当病院は九州人工透析研究会、九州CAPD検討会、北九州透析懇話会などの事務局も担当しており、今年3月に定年・非常勤となった安永から次期体制へとシフトさせて頂くことを考えております。

COVID-19パンデミックも経験して、新病院は『感染症に強い』『高い効率性』『患者プライバシーへの配慮』『高いセキュリティ』の4点において構造化された病院となりました。

また今季の猛暑の中、高断熱構造で患者さんや家族、スタッフともに快適な環境が整いました。田んぼのど真ん中で交通の便が少し悪いのですが、年を経て改善することかと思えます。

今後とも福岡県透析医会の皆様のご支援、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。